昭和文學全集 2

山本有三集

昭和二十七年十一月二十一日　初版印刷
昭和二十七年十一月二十五日　初版發行

昭和文學全集 2
山本有三集

著作者　山本有三
發行者　角川源義
印刷者　小泉輝章
東京都文京區戸崎町七一

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロース工業株式會社
印刷所　小泉印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

山本有三集

昭和文學全集

角川書店版

目次

巻頭写真　七
筆蹟　七
波　四七
妻　九五
子　一二四
父　一三七
路傍の石　二三七
戦争とふたりの婦人　二三七
はにかみやのクララ　二五八
ストウ夫人　二八一
こぶ　三〇〇
無事の人　三四
解説　高橋健二　三六八
年譜

装幀　原弘

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

山本有三集

波

川端康成

妻

一、一

行列はいつまでも停留して居りた。おりる時帽子は手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は車の窓はた風に押されて歩いて行った

波

妻

一ノ一

行介(コウスケ)はいつもの停留所でおりた。おりる時、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行った。とき〴〵紙くずや、こっぱなぞが、トンボ返りをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでもカラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。その上どうかすると、クギでも投げつけられるように、おゝ粒の砂がぱら〳〵と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は横丁にはいったら、よほど風がよけられるだろうと思った。いそいで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし暫くしてから、「きょうは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう。」けさ出がけに、彼は妻にそういったことを思いだした。

そうだ。肉を買って行ってやらなくてはならない。彼はそれを思いだすと、また電車どおりに引っ返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえが肉を切っているあいだ、行介は厚いまな板の前に突っ立って、ホウチョウの動くさきをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを驚くほど渡だたせた。

まな板の上になゝめに落ちているゆう日は、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちょうど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげてある大きなガラス戸だなに、きらっ、きらっと、あかるいはん点をはねかせた。

突然、ふわっとしたものが、ひざのあたりにからみ付いた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまくられて、飛んできたのだった。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられたように、彼の足もとは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」

心のなかでつぶやきながら、彼はいま〳〵しそうに新聞を往来にけとばした。しかし、べっとりとはりついたようになって、ふる新聞はなか〳〵足から離れなかった。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を手でつまんで、かざしもに放してやった。ぼろ〳〵に破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだくらい、まのわるいものはなかった。

板まえは切った肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それからハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声がした。振り向くと、園田(ソノダ)が立っていた。

行介はちょっとしょげたが、向こうが笑っているので、彼もてれ隠しに、ほゝえんで見せるよりほかはなかった。

「どちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかってしまったな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおっかぶせていった。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからないと思った。

「いや、あい変わらず気がきいているよ。」

「何を言っているんだい。」
「おれがくることをあらかじめ察して、肉を買っておこうなぞとは心がけがいゝ。」
「多分そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいゝよ。君にはコマ切れをたゝさん買っておいた。」
「コマ切れ、コマ切れか。」
「何を言っているんだい。みっともない。」
「おい。――女房にコマ切れを買って帰りけり。ってのは、どうだい。」
「どうもうるさくってかなわないな、迷句をひねくるやつが、そばにいると。」
「しかし実感があってなか〳〵いゝだろう。」
「うん、たび〳〵コマ切れを買いつけていると見えて、その点はさすがだね。」
「まだあんなことをいってやがる。もういゝ加減に降参しろよ。」
「はゝゝゝ。」
「お待ちどお様。」と、いう声が響いた。そして竹の皮づつみが行介の前に突きだされた。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。
「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかったね。」
「なあに、君の姿は三丁もさきからわかっていた。」
「どうして。」
「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出っぱっていりゃ、いやでも目につくじゃないか。おれは道〻考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背ってやつは、なか〳〵句になりにくいね。」
「ばかにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行ったのかい。」
「うん、もう帰っているころだと思って。」
「それなら待っていてくれればいゝのに。」
「おれもそうしようと思ったんだが、だれもいなかったもんだからね……」
「かまやしない。あがりこんで待ってりゃいいじゃないか。ほかのうちじゃあるまいし。」
「ところが、戸がしまっているんだ。引っぱってみたけれど、あかなかったから、しかたがない、帰ってきたのだ。」
「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どっかへ買い物に出たんだろう。」
　きょうは土曜日だし、ちょうど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思って、行介は途中、とりつけのさかや屋に寄って酒を頼み、うちに帰った。うちは園田がいうように戸がしまっていた。妻はまだ帰っていないらしい。彼は裏ぐちにまわって、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

　なかはまっ暗だった。
　行介は手さぐりで電燈を探し、スイッチをひねった。それから、いそいで玄関に行って、格子とあま戸をあけた。
「いや、お待ちどお。」
「ほんとうにお待ちどお様だ。なんだね、肉やのまな板の前に立たされるのもいゝ図じゃないが、戸のしまったうちの前に、ちょこなんと突っ立ってるのも、あんまりありがたいものじゃないね。」
　園田はへらず口をたたきながらあがってきた。
　行介はなが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎった鉄ビンが、重たいふたをぱたりぱたり押しあげているので、彼は立ったまゝ、あわてて鉄ビンをわきにおろした。「戸じまりをして、そとに出て行くくらいなら、火をいけて行けばいゝのに。」腹のなかで、彼はるすの妻にこゞとをいった。
　しかし、じつをいうと、赤〻とおこっている火は、吹きっさらしのなかを、ひえ切って帰ってきたからだには、この上もなくうれしいものだった。ふたりはなが火バチの上に手をかざしながら話し合った。
　園田がやってきた用むきは金のことだった。まだ来月と思っていた細君のお産が、急におとゝいあったものだから、てんてこ舞いをしてしまった。で、五十円か、三十円ばかりほしいというのだった。ふたりはしょっちゅう、このくらいの金を貸したり、借りたりしているなかだった。園田はずぼらのように見えて案外かたい男で、金銭でまちがいのあ

ったことはなかった。ことにおもしろいのは、それを返しにくる時、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのものを、いつもきっと持ってくることだった。行介も借りた時は、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十円ばかり手もとにあったから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立って行って、ネズミ入らずだの、戸だなだのを、しきりにがたぴしいわせた。

「何を見つけているんだい。」

「おかしいな。どこへしまいこんじまったのかしら。どうも女房がいないとしようがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことをいわないで、ぼくがせっかく買ってきたんだから、肉を突っついて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうは、ばかに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになったりしちゃ、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことをいうやつだな。そんなことをいってるひまに、いゝから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持ってきた酒のトックリを、園田の前に押しやった。

「驚いた。細君がるすだと、おれのほうにまで雷がおっこってくる。」

「つまらないことをいうなよ」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ、恩をきせてから飲もうってんだから、君は太い料けんだよ。」

「ナニ、そんなことはありゃしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやがったのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困ったな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めったに牛肉なんか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりゃしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことをいう。だから酒のみはいやしいってんだよ。」

「そう、ものをはっきりいうもんじゃない。酒がはいらないうちに、まっかになってしまうじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころときたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりゃしない。」

「実際なんだね。いる時にはさほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんかよしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい細君なんてものは……」

「あった、あった。なあんだ、こんなところに突っこんであったんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむきだしのまゝ立てかけてあった。

「そうか。じゃ、いよ〳〵君のしいれてきた牛肉にありつけるわけだね」

「今まではどうなることかと案じていたって、いやしないか。はゝゝゝ、さあ、これでネギさえあれば文句はないぞ。ところでネギはと……」

行介は台どころのあげ板をあけて、下をのぞいた。暗いなかに白く光ったものが十本ばかりそり返っていた。彼はそれをみんな取りだして水で洗い、危っかしい手つきをしながら、ざくり〳〵切りはじめた。

こうしてネギが買ってあるところを見ると、妻は彼が肉を買ってくることを、忘れているものとは思えない。しかし今もって帰ってこないというのは、どうしたわけなのだろ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

う。彼の帰ってくる時間は充分承知のはずだし、それにその時刻に、うちをるすにするというようなことは、今までにもめったになかったことだけに、行介はホウチョウを動かしていながらも、考えは絶えずそこに走っていた。

「おい〳〵、カフスがぬれるよ。」

園田の声で行介の考えは、たち切られた。

「洋服を着かえたらいゝじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ細君のエプロンを前にかけるんだね。そうしてついでに、あたまに白い帽子を載っけるんだ。」

「ばかにするな。」

「おい、新まえのコックさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたころが思いだされるね。」

「あの時もさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんど血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなったのは、あれからだと思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものもいえやしない。——そろそろおちょうしをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかったのかい。」

「まだやらなかったかって、牛ナベが見つからないうちから、おかんをしちゃ、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいっているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄びんのなかに沈めた。

「え、君。この、ボチャーリという音は、なんともいえないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、しばいでいや、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがボコリだの、ボチャリだのときた日には、酒の味はなくなってしまうからね。おれは女房にだって、こいつばかりは任せはしないよ。——女房ってば、奥がたはばかに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくたって、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切ったネギをサラにもって、洗った牛ナベといっしょに茶のまに運んだ。

やがて肉がじゅく〳〵煮えだして、なが火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにもいうところはないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまう行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、いきを吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰ってくりゃだろう。」

園田はゆるやかに、サカズキをくちびるのところに持って行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんかどうだっていゝさ。」

「なんとかいってら。」

「全くだよ。」

「そんなことをいうと、向こうじゃ、もう帰ってまいりませんよ、といってくるぞ。」

「ところが、そんなのとはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがってください、って、ところかね。おい、君。こっちのほうが煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。ばか〳〵しい。」

「さようでもございましょうが、これは手まえが買ってまいった肉でございますし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何か冷たいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかった。しかし、冗談をいっているうちに、自分でも空々しくなって、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介

はそれを見ると、おどすように、
「おい、帰るのはまだ早いぞ。」
「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。
「もう少しいろよ。」
「う、うん。——しかし遅いな。」
「まだそんな時間じゃないだろう。」
「いや、奥さんがさ。——買い物にしちゃ少しおそ過ぎるじゃないか。」
「……」
「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」
「そうだね。」
「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちょっとお尋ねしますが、手まえどもの家内はどこにまいりましたろうって。」
「なんだ。本気にしていると、すぐちゃかしやがる。」
「しかし、ほんとだよ。何かことづけがあるかもしれないぜ。」
「いゝよ。女房なんか、いたっていなくたって。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」
「おい、おれを女房と取っちがえちゃ困るよ。ぼくは奥がたが帰ってくりゃ、立ちどころに引き取ろうって人間なんだからね。」
「そう帰る〳〵っておどかすなよ。」
「いや、そういうわけじゃないけれど、何しろ、うちのほうがなんだからね……」
「あ、そうか。はゝゝゝ。——そんなに子どもってかわいいものかね。」

一八六

「まあ、持ってみろよ。」
「いやにおやじぶるな。」
「しかしね、君……」
「驚いたな。これが当年の園田だと思うと。」
「まあ、なんとでもいうがいゝさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちっきりないんだぜ。結婚してまだやっと一年だろう。」
「おい、はじめておやじになったって、そう威ばるなよ。」
「いや、べつに威ばりゃしないが、なんだよ、君、子どもってものは……」
「子ども、子どもって、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持っているよ。」
「なんにんでも？」
「うゝ。」
「おい、ほんとうの話かい。」
「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかうよ〳〵している。」
「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ人をかつぐから。」
「いや、かついだんじゃない。まじめな話だ。」
「ばか〳〵しい。学校の子どもなんか、なんにんあったってしかたがないじゃないか。」
「そんなことはないさ。」
「いや、君がなんといったって他人の子じゃだめだよ。自分の子でなくっちゃ。どうも小学校の先生なんてしょうがないね。こんなことがわからないんだから。」
「何がしょうがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじゃ、学校の教師はつとまらないよ。」
「そりゃ教壇に立った時の話だ。まあ、自分の子どもを持ってみろよ。どんなもんだか。」
「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」
「はゝゝゝゝ。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりゃ驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。何しろ赤んぼうと産婦とおきっぱなしなんだからね。」
「そうか。そりゃ悪いことをしたな。あんまり引きとめちゃって。」
「なあに〳〵。じゃ奥さんが帰ったら、どうかよろしく。」
「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」
「うん、是非やってきてくれたまえ。」
園田が帰ったら、家のなかは急にひっそりとしてしまった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされているなかに、ごろりと横になった。そして今まで園田がすわっていた座ぶとんを寝たまゝ腕をのばして引っぱり寄せ、二つに折ってあたまの下にあてがった。
牛ナベは、つゆが切れたとみえて、じいじ

い火バチの上でうなっていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがろうともしなかった。

そのとき裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰ってきたのかとも思ったが、それにしては、少しするど過ぎる物おとだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。そとはあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがって、自分の机のところに行った。彼女は急な用事でもできて、外出したのかもしれない。何か書いたものがおいてありゃしないか、彼はそう思って机の上を調べたけれども、いや、引きだしのなかまで調べたけれども、それらしいものは見あたらなかった。

いったい、きぬ子はどこへ行ったのだろう。彼にはまるで見当がつかなかった。園田がいったように、実際、隣へ行って聞いてみようか。しかし、それもあんまり気がきかな過ぎる。第一、何かことづてがあったくらいなら、さっき裏ぐちをあけてる時に、隣のおかみさんはおむつを干していたのだから、あの時ちょっと言ってくれそうなものだ。黙っていたところをみると、隣にも、なんにもいって行かなかったものに相違ない。して見れば、そう手まの取れる用事とも思えない。それだのに、時計はもう九時を過ぎている。

どうかしたら、また、おやじが……

きらっとその考えがきらめいたが、行介は強くそれをうち消した。いくらなんでも、またおやじがそんなことをしようとは考えられなかった。近ごろは非常におとなしくなっているようだし、ことにふたりの結婚を心から喜んでいたことは、彼にもはっきり見えていたのだから……

あるいは、だれかに誘われて、活動でも見に行ったのだろうか。いや、るすにそんな事をする気づかいはない。見に行くなら、彼が帰ってきてから行っても、充分まに合うはずだ。

行介は今はじめて知ったように、あわてて牛ナベを火バチからおろした。ネギがまっ黒になって、ナベにこびりついていた。

彼はチャブ台のそばにおいてあった、さか屋のトックリを引き寄せた。振ってみると、まだいくらか残っているらしい。彼はついでは飲み、ついでは飲み、ありったけ飲んでしまった。ひや酒が妙にはらわたにしみ渡った。

大きなあくびをして、彼は腕をのばした。からだがひどく窮屈だなと思ったら、洋服を着かえてないことに気がついた。

彼は大儀そうに立ちあがって、タンスの前に行った。そこには着がえがちゃんと畳んであった。彼は妻の心をうれしく思いながら、洋服を脱いで、ふだん着に着かえた。しかし、うしろから着せかけてくれる、やさしい手のないことが、ものたらなかった。

それからクツ下を脱いでタビをはこうとすると、足のさきに何かカサリとさわったものがあった。彼はごはん粒を踏みつけた時のような、いやな気もちがした。

「なんだろう。タビのなかに。」

彼はへんな気がしながらタビを裏がえして振ってみた。四角い、桃いろのものがこぼれ落ちた。

封筒だった。おもてに「先生さま」裏に「きぬ子」としてあった。

ばかなことをしたものだ。タビのなかに手がみを入れておくやつもないものだ。と、彼は思った。しかし妻がタビのなかに手がみを入れておく事が、あまりに尋常でないので、行介はある恐れをいだきながら、ふるえる手で封を切った。

一ノ八

先生、おゆるしください。何もかもあたしが悪いのです。

すっかりお話をしてと思ったのですけれど、それがあたしにはどうしてもできないのです。すみません。すみません。

先生、どうかおゆるしください。おゆるしください。

くれぐれもおからだをお大事に。

きぬ子

先生さま

行介は手がみを読むと一層不安になった。ぼんやり感じていたものに、今、ごつうんと突きあたったような気がした。しかし、おゆるしくださいとは、何をゆるせということなのか。お話したいことがあるのだができないというのは、いったいどんな話なのだろう。その点になると、彼はまたやはり、なんにもわからなかった。

あるいは男でもできたのであろうか。けれどもそれについて思いあたるようなことは、彼には一つもなかった。しいて考えれば、近ごろいくらかそわ〳〵していたと、思われるぐらいなものであった。

ひょっとしたら、さっきもちょっと心配したように、父おやがまた何かをたくらんだのかもしれない。あのおやじのことだから、それはやりかねないことだ。きぬ子が手がみをタビのなかにそっと入れて行ったということも、おやじにけどられない用意かもしれない。

彼はそう思うと、もうじっとしてはいられなかった。なんにしても、あれのおやじのところに行くのが第一だ。よし彼がかどわかしたのではないにしても、彼のところに行けば、きっとようすがわかるにちがいない。行介は戸じまりをしてそとに出た。

おやじのうちは行介が奉職している小学校の近くだった。おゝ川を越した向こうだからかなり遠いけれども、彼は毎日かよい慣れてる道だけに、それほどにも思わなかった。

やがて彼は路地の奥の、その家の前に立った。もう寝たとみえて、なかは暗かった。ことによると、まだ帰らないのかもしれないとも思ったが、とにかく彼は声をかけた。

「今晩は。もうおやすみですか。」

「どなたです。」

なかから、すぐ答えがあった。おやじの声である。行介はしめたと思った。

「わたくしです。」

「あ、あんたか。ちょっと待ってください。」

あま戸のすきから急に光が流れてきたと思うまもなく、戸が開かれた。

「どうもおやすみのところを」

「なあに、寒いもんだから、寝どこにもぐりこんじゃいたが、まだ眠ったわけしゃありませんや。——今、火を起こします。」

おやじの宇平はたきつけを持ってきて、火バチに火を起こしはじめた。

「いや、火も何もいりません。」

「そとはえらかったでしょう。今夜は少ししみが強いようですな。どうもこの風がやんでくれんと……」

「おとっつあん！」

行介はすぐ事件の中心にはいって行きたかった。話題を変えるために、彼はきっぱりしたことばで宇平を呼んだ。しかし老人は、たきつけの上に炭を積むことに熱中しているらしく、返事さえしなかった。

「おとっあん！」

もう一ど呼んだ。

「え。」

「きょう、きぬ子がこなかったでしょうか。」

「いゝえ。」

火バチのなかへ首を突っこんだまゝ、宇平はそっけなく答えた。

こいつ、しらばっくれている。それで首をあげないんではないか。行介はそんな気がした。そう思うと、キツネのように口をとがらせて、火を吹いている宇平の顔が、いっそう疑がわしく見えてきた。そして、いきを吸ったりだしたりするたびに、ひたいのあたりが急に赤くなったり暗くなったりするのも、火が反射するためばかりではないようにさえ思えた。

一／九

「おきぬは——近ごろさっぱり——きません。——わしはどうしたのかと——思っているんです。」

宇平は火を吹きながら、とぎれ〳〵のことばでいった。

「そうですか。ぼくはまた、こっちにきてることばかり思っていました。」

「いゝえ、こやしません。じつをいうと、わしもひとりで寂しいんでな。たまにはきてもらいたいと思っているんですよ。それで、一

度あんたに、そのことを頼もうかと思っていたくらいです。——あ、やっと起こった。さ、どうか。——おや〳〵、こりゃ鉄ビンに湯がなくなっている。」
「いや、お茶なんかいゝですよ。それよりおとっつぁん、あなたは隠しているようなことはないでしょうね。」
「隠す。何をわしが隠してる？」
「いや、ぼくはたゞはっきりしたことが知りたいのです。それで、何もかもいってもらいたいと思うんですが。」
「そりゃいったい、なんのことです。おきぬがどうぞしたのですか。」
宇平がしらばっくれてそう言っているのか、全く知らないでそう言っているのか、行介にはわからなかった。彼は黙ってきぬ子の置き手がみを老人に渡した、老人はしばらくのあいだ、じっとそれを見つめていた。
「あんたはわしを疑ぐっているんですね。おきぬをそゝのかして、わしが家出させたとでも思っているんでしょう。——無理はありません。無理はありません。おきぬの事じゃ、わしはあんたに、どんなに、疑ぐられたって、しかたがありません。」
「いや、疑ぐるってわけじゃありませんが、あなたなら、しんみの親だから、何か知っていることがあると思っただけなんです。」
「いゝえ、わしはなんにも知りません。さっきも話した通り、もう半つきもうちにはこないんですからね。」
「じゃ今度のことについて、あなたは、うすうす気がついていたっていうようなことはないんですか。」
「いゝえ、わしは実際なんにも知りません。」
宇平はまぶたに指をあてて、涙をおさえながら、しくしく泣きだした。
「どうしたんです。おとっつぁん。ぼくがいったことが気にさわったのですか。」
「いゝや、そうじゃありません……」
「ぼくはあまり思いがけないことが起こったので、かなりあわてていたから、失礼なことをいったかもしれませんが……」
「いゝえ、決してそんなことじゃありません。わしはあんたに申しわけがなくって、申しわけがなくって……」
「おとっつぁん、まあ、そんなに泣いたって……」
「あんたのおかげであれの身も定まり、わしは安心しておりましたのに。……こんな、こんなことをしでかしてしまって……」
「今さら、そんなことをいったってしかたがありませんよ。それより、どこへ行ったか、そのほうの心あたりはありませんか。」
「わしには皆目わかりません。」
「弱ったな。まさか死ぬようなことはないだろうな。」
「わしもそれを心配しているんですが、何しろ、なんで家出したのか、それが第一わからないんですからね。」

一ノ十

ふたりはきぬ子のことについていろ〳〵話し合ったが、結局、「どうしたんだろう。」「どこへ行ったんだろう。」をくり返すだけに過ぎなかった。警察に捜索ねがいをだしたものだろうかということも、むろん話題にのぼったけれども、行介の職掌がら新聞に出ることは困るので、それはもう少し待ってみることにした。
何かわかったら、お互いに知らせ合うことにして、行介は宇平のうちを出た。宇平がなんにも知らないということは、行介には意外な気がしたが、しかたがなかった。
風は昼まよりも強かった。正面を向いたまま歩いては行けないくらいだった。彼は逆流を乗りきる時のように、あたまを前に突きだし、からだを少しなゝめにして、黒い流れのなかを押し進んで行った。やねの上のトタンのカンバンが騒々しく両がわでわめいていた。停留所には人かげもなかった。もうかなり遅い時間だが、まだ赤か、うまく行けば青がくるだろうと思って、彼はそこに待っていた。星があぶなっかしく空に光っていた、今にも風で吹き落とされそうに。
行介は立ったまゝ片ほうの足の甲の上に、片ほうの足のひらをかさねて、感じのなくなっている足のさきをこすり合わせた。

電車はなかなかこなかった。彼は未練なような気がしながらも、きぬ子の手がみを、そっとふところからだした。そして赤い街燈の下で、もう一度それを開いた。

しかし最初の二字を読んだだけで、彼の目はまっ暗にされてしまった。

「先生、おゆるしください。」

その先生というもじが――かくはすくないが、妙にとげとげしたそのもじが、鋭く彼のひとみに突き刺さった。目の前がまっ暗になったと思った瞬間に、その暗いなかに動いているあるものを、行介はきらっと感じとった。さっき読んだ時は、どうしてこれがわからなかったのであろう。自分が教師をしているものだから、先生と呼ばれても、べつに気にもとめずに、読みすごしてしまったが……。

なるほど、いま自分は教師をしている。そして、きぬ子もまたその教え子であったにはちがいない。しかし彼は今その夫であり、彼女はその妻ではないか。自分の夫を、手がみのなかで先生と書くものがどこにあろう。なぜ「あなた」と呼びかけないのだ。なぜ「あなた」と書けなかったのだろう。あるいは不用意に、ひょっとこの字を使ったのだとしても、その不用意のうちにこそ、恐ろしい真実はこもっているのだ。

結局、ふたりのあいだは、先生と生徒との関係に過ぎなかったのではなかったか。彼がどんなに彼女を愛していても、彼女は、彼を先生以上には感じていなかったのではなかったか。「あい変わらずだね。」と、友にひやかされるほど、彼はきぬ子をいつくしんできた。この心がきぬ子には通じなかったのだろうか。彼女には教壇に立っている彼の姿ばかりが目について、牛肉をぶらさげて帰る彼、なが火バチのそばにすわっている彼は、少しも目にはいらなかったのではなかろうか。もっとも、園田のような男となら、彼はずいぶん、冗談をいったり、ふざけたりするのだが、きぬ子の前ではほとんど、そんなことをしたことがなかった。もと彼女の教師であったから、厳格に構えているというような気もちは、みじんもないのだけれども、きぬ子にしてみれば、そこにものたらない何かがあったのではあるまいか。それがついに「先生」になってしまったのではあるまいか。

さっき字平が泣きだした時、これもまた例の手ではないかという疑がいが、まだ、あたまのどこかにあった。しかし今度の事件はたしかに、おやじのしわざではない。この「先生」こそ、彼女を追ったムチに相違ないと行介は思った。

一ノ十一

やっと電車がきた。赤だった。行介はいそいでそのほうに走りだそうとしたが、どうしたのか足が一歩も前に出なかった。

「乗らないんですか。」

車掌はベルのひもをつかんで、せっかちにいった。

「いゝえ、乗るんです。乗るんです。」

行介はあわててそう答えたが、どろ田にはまりこんだ時のように、からだだけ前にのめるばかりで、足は少しも動かなかった。しかし急いで彼は両手を電柱に突っぱって、ぎゅっと腰を浮かした。もげるように足が土から離れた。彼はやっと電車にすがりつく事ができた。

「足がわるいんですか。」

彼を引っぱりあげながら車掌はたずねた。

「いゝえ、こんなことは、めったにないんですが。――どうもすみません。」

礼をいって行介はすみのほうに腰をおろした。実際、こんなふうに歩けなくなることは、そうしょっちゅうある事ではないが、しかしこれは決して突然のでき事ではなかった。腹のなかではまた例のやつが起こったなと、彼はまゆをひそめないわけにはいかなかった。この一、二年、忘れたように引っこんでいたマヒ症が、急に襲ってきたものらしい。寒いなかに長いあいだ立っていたことが、わるかったにちがいない。それに久しくやめていた酒を、今夜は少し飲み過ぎた。

歩きだしは悪いけれども、二、三歩あるくと、あとはそう苦しいことはなかった。彼は電車をおりてから歩いてうちに帰った。いつも前こごみのからだを、いっそう前こごみに

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com